



体力テスト：6月7日（金）



ほうない

第4号

村上市立保内小学校
強い心 豊かな心

〒959-3107

村上市下鍛冶屋264-2

TEL0254-62-2302

FAX0254-62-5553

子どもを健やかに育む

『愛の鞭（むち）ゼロ作戦』

校長 須貝 学

タイトルと同じパンフレットを先日、全家庭にも配付しました。日本では「愛の鞭」という言葉があり、厳しさも大切という考えが歪曲されて、家庭では体罰というしつけが容認される風潮が根強く残っています。

しかし、子どもの教育において体罰や暴言にはまったく効果がなく、むしろ親との信頼関係を構築できなくなり、いじめなどの問題行動に及びリスクが高くなると言われています。臨床心理士で文京学院大の木附千晶氏は、子どもにとって親からの体罰は、他人からの暴力よりも傷つくといいい「受け続けると、自己否定感が強くなり、自傷行為や精神疾患の危険性も高まる」と述べて警鐘を鳴らしています。

医学的にも体罰や暴言は子どもの脳の発達に深刻な影響を及ぼすことが証明されています。厳しい体罰により、社会生活に必要な脳部位である前頭前野の容積が減少してしまったり、言葉の暴力によって、声や音を知覚する脳部位である聴覚野が変形してしまったり

したそうです。「では、たたくずに、怒鳴らずに、どうやって育てればいいのか」と疑問をもつ親が多いようです。そんな質問に即答できなかったことがきっかけとなり、「しつけの仕方を学ぶプログラム」を考案したのが、神奈川県茅ヶ崎市福祉政策課の伊藤徳馬氏です。伊藤さんが作成したプログラムの基本にあるのは、①「ちゃんとしなさい」などと曖昧な言葉ではなく、具体的に伝えること、②よいことは褒め、子どもにどうすればいいのか考えさせること、だそうです。

そうは言っても、実際は思ったとおりにうまくいくものではありません。いくらか言っても子どもが聞くことを聞いてくれず、イライラが募って、爆発しそうになっってしまう。そんな時には、自身をクールダウンさせるための方法を見付けておくことが大切です。また、自分自身がSOSを出して、家族に分担してもらったり、友だちに苦勞を気軽に相談したりすることも効果があるそうです。